解説：現代ドイツ神学への一視角

岡田勇督

1. はじめに

日本の大多数の読者にとって、現代ドイツで行われている組織神学の議論はどこか霧に包まれているようにはっきりしないものであったといえる。明確な形で解説や翻訳が日本でも充実している(あるいは現在進行形で充実してきている)のは、20 世紀前半におけるバルトを中心とした弁証法神学の世代、そして広い意味でそれに対するリアクションとして 20 世紀後半に登場した、解釈学的神学、パネンベルク、モルトマンらの三つ巴の時代までであるといってよい[1]。E・ユンゲル(1934-2021)や W・パネンベルク(1928-2014)が亡くなり、J・モルトマン(1926-)も(依然として著作を発表しているが)老齢にあるなかで、その次の世代にどのような神学者が育ってきているのか、どのような神学的テーマについて議論がなされているのかは、断片的には日本語に紹介・翻訳されることはあっても、体系的な意味での全体像をつかむのが難しい状況にあったといえるだろう。

ここに訳出したのは、上述の穴を埋めるような以下の総説である。Dirk Evers, „Neuere Tendenzen in der deutschsprachigen evangelischen Dogmatik“, *Theologische Literaturzeitung* 140 (1/2), 2015, S.3-22. 著者のディルク・エーヴァース氏(1962-)は現在ハレ大学の組織神学教授を務めている。テュービンゲン大学で博士号(1999 年)と教授資格(2005 年)を取得しているが、そのさいに E・ユンゲルの薫陶を受けた。本翻訳のなかでも明かされているように、エーヴァース氏の組織神学における立場は解釈学的神学に連なるものであるが、氏の専門の特徴は特に、その神学的立場から〈科学と宗教〉の分野への視角を切り開いているところであるといってよいだろう。発表された単著を例に見てみると、2006 年の単著『神と可能世界――〈可能なもの〉について神学的に言明する際の論理について』ではライプニッツや英米圏の分析哲学を参照しつつも〈可能的なもの〉というどちららというと解釈学的神学のカテゴリーにかんする議論を行っているが[2]、2000 年の博士論文『空間・物質・時間――自然科学の宇宙論と対話する創造神学』(ヨーロッパの〈科学と神学〉学会賞)や[3]、2010 年の『二つの視点と一つの現実――信仰と科学の言説にかんする問題』ではおもに〈科学と宗教〉の問題系に取り組んでいる[4]。氏のこのような特色は、本論のな

---

[1] このような紹介の一例としては以下を参照。森田雄三郎「現代神学の動向」『日本の神学』(26), 1987 年, 9-26 頁(同論考は以下にも収録されている。森田雄三郎『現代神学はどこへ行くか』教文館, 2005 年、32-48 頁)。森田は当時の「現代」神学の潮流を「一、解釈学としての神学」「二、歴史の神学(宗教学、宗教史、科学論の神学)」「三、希望の神学、革新の神学(解放の神学)」「四、プロセス神学」と分類している。

[2] Dirk Evers, *Gott und mögliche Welten. Studien zur Logik theologischer Aussagen über das Mögliche* (Religion in Philosophy and Theology 20), Mohr Siebeck: Tübingen 2006.

[3] Dirk Evers, *Raum – Materie – Zeit. Schöpfungstheologie im Dialog mit naturwissenschaftlicher Kosmologie* (Hermeneutische Untersuchungen zur Theologie 41), Mohr-Siebeck: Tübingen 2000.

[4] Dirk Evers, *Zwei Perspektiven und die eine Wirklichkeit. Anregungen zum Diskurs*

かにも随所に現れているといえる。

2. 梗概

本翻訳は近年ドイツ語圏のプロテスタント神学で行われている様々な議論の潮流を概観する総説であるが、箇所によってはかなり込み入った議論がなされているところもある。ここでは簡単に議論を要約することによって、本論を読む際の手引きをすることにしたい。エーヴァース氏によれば、近年の議論は大きく三つ――自由主義神学、解釈学的神学、形而上学的宗教哲学に分けることができる。そして、これらがそれぞれ一人称、二人称、三人称の観点において神学を展開する立場であると分類している。

第一の立場として挙げられるのは、19 世紀にシュライアマハーからトレルチあたりまでの理論形成によって成立したリベラル・プロテスタンティズムの後継となるような自由主義神学・学問的神学である。20 世紀後半に解釈学的神学、パネンベルク、モルトマンらの三つ巴がそれぞれの方法でバルト神学と向きあおうとした一方、自由主義神学の潮流はシュライアマハー・ルネサンスやトレルチ・ルネサンスなどのようなかたちで 19 世紀の古典的な思想家を再評価するクラシックな方法で道具立てをそろえていった。本論では第一の立場の古典的な理論的表現形式として主観性理論 Subjektivitätstheorie という用語がしばしば登場するが、これはまさにカント以降の超越論的な主観性(シュライアマハー的にいえば〈端的な依存感情〉、あるいはトレルチ的にいえば〈宗教的アプリオリ〉)のなかに人間の宗教性の根源を認めようとする宗教理論である。この反省的主観性において、人間は世界を宗教的に解釈 deuten することができる[5]。このような意味で、本論では第一の立場が〈一人称〉において組織神学を展開する方向性であると整理されている(〈私〉のなかに現出する宗教性)。

しかしエーヴァース氏の説明するところでは、近年の議論はこのような狭い意味での主観性理論を越えて、文化学におけるより広い文脈において〈宗教〉を探求する方向へと議論が移っている。そこで問題になるのは、例えば宗教についての言説理論 Diskurstheorie と呼ばれるものであり、これは組織神学と宗教学 Religionswissenschaft が交差する論点となっている。宗教という概念はヨーロッパで成立したものであり、そのなかには他宗教に対してキリスト教の優位性・絶対性を証明するためのヨーロッパ中心主義的なイデオロギーが埋め込まれているといういわゆる宗教概念批判は、宗教という一般概念に立脚して理論を展開しようとする自由主義神学の立場にとっての挑戦となっている。また、宗教現象をより広い文脈において捉えようとするなかで欠かせない自然科学との対話、特に認知科学的・進化生物学的なアプローチがどのようにかかわってくるのかも、重要な論点として紹介されて

---

zwischen Glauben und Wissenschaft (Herrenalber Forum 62), Karlsruhe 2010

[5] ちなみに、〈解釈〉ないし〈解釈学〉は第二の立場の解釈学的神学も強調する概念であるが、第一の立場の〈解釈〉には deuten の語が多く用いられる一方で、第二の立場はどちらかというと〈理解 verstehen〉の概念を基軸としている。

いる。

第二の立場としては、20 世紀後半の三つ巴の時代から比較的直線的に発展してきたといえる解釈学的神学の立場が挙げられる。第一の立場が主観性の自己解釈という形で一人称の宗教概念を基礎にする一方で、第二の立場は人間に〈二人称〉的に相対する神(人間にとっての「あなた」としての神)が問題になる。この解釈学的神学にとって重要な道具立てとなるのは、本論でも繰り返し論じられているとおり〈言葉の出来事〉による実存の転換であろう。ブルトマンが論じたように、神学において重要なのは聖書に書かれている客観的な情報(たとえば世界が 6 日で創造されたこと)ではなく、それを読んで解釈・理解することによって人間実存に変化がもたらされる実存論的解釈である(たとえば〈創造〉という考えによって自分の世界の見方が一新されること)。ここで紹介されている最近の解釈学的神学も、さまざまな切り口からこの基本モチーフを展開することを試みている。

紹介されている具体的な論者のなかで、すでに古典的な地位を獲得しつつあるといっていいのはインゴルフ・ダルファート Ingolf Dalferth(1948-)であろう。日本でも比較的知られているダルファートは、ユンゲルの次の世代における解釈学的神学の論客として旺盛に論考を発表してきた神学者である。なかでも、本論でも触れられている『ラディカルな神学』(2010)は解釈学的神学者としてのダルファートの基本ラインを伝える基礎文献といっていい[6]。本論ではまたその次の世代として、フィリップ・シュテルガーPhilipp Stoellger (1967-)やハートムート・フォン・ザース Hartmut von Sass (1980-)などの比較的若い世代まで紹介がなされている。さらに、以前の解釈学的神学が人間同士のコミュニケーションという言語的な解釈モデルに拘り過ぎてしまった点を指摘し、それを乗り越える展開として、近年広げられている図像解釈学の議論などにも紹介の手が広げられている。

第三の立場としては、アングロサクソン圏の分析形而上学の方法論を取り入れた形而上学が挙げられている。一般的に、ドイツを含めたいわゆる大陸系の思想が、カントを境として〈神の存在証明〉などのような自然神学の伝統的議論から離れていくのに対し、英米系の宗教哲学は分析哲学の方法論を取り入れながらそれを現在まで保持・発展させてきているという見取り図が大まかな前提として存在する。このような一般的傾向に対して、この第三の立場はドイツという大陸の伝統にありながら分析系の方法論を取り入れることによって、「究極的な問いに対して理性による解答を与える試み」として組織神学の立場を構想しようとしている。この立場にとっては、神などの超越は理性的推論によって扱われる客観的な認識対象であり、そこには第二の立場が要求するような人間の実存は介在しない(例えば、私の実存如何にかかわらず、2024 年の時点においてドイツの首都はベルリンである、ということが客観的真理であるように)。その意味でこの立場は〈三人称〉において、すなわち人間の認識から独立した客観的存在としての〈それ〉としての神について語るものと位置づ

[6] 以下の論文は『ラディカルな神学』の簡単な要約となっていて入門として便利である。Ingolf U. Dalferth, „Hermeneutische Theologie - heute?“ in: Ingolf U. Dalferth/ Pierre Bühler/ Andreas Hunzinker (Hg.) *Hermeneutische Theologie – heute?*, MohrSiebeck: Tübingen, 2013, S.3-38.

けられている。

この立場がおもに展開される代表例として本論文で取り扱われるのは、叢書「コレギウム・メタフィジクム」と、その編集主幹のひとりであるフリードリヒ・ヘルマニ Friedrich Hermanni の宗教哲学『形而上学――究極的問いへの試論』である。英米圏における宗教哲学の教科書的トポイともいえる〈神の存在証明〉や〈悪の問題〉に加え、〈心身問題〉や〈宗教多元性〉などのテーマを扱いつつ、ヘルマニはいわゆる分析哲学的な手法を中心とし、かつ古典的な思想家を道具立てとして用いる形で、みずからの宗教哲学を展開してゆく。そのさい特徴的といえるのは、分析哲学の手法を用いるといっても単に英米圏の議論の枝葉を後追いするのではなく、いわゆる大陸圏の古典的思想家にかんする議論を大胆にそこに組み込んでゆく姿勢である。のちにもすこし触れるように、いわゆる大陸系と分析系がそれぞれの蛸壺に閉じこもるというありがちな傾向に対して、現代ドイツの哲学ではその区別を取り払って両者を大胆に融合するような傾向が見られる[7]。第三の立場であるこの形而上学神学もその流れに棹さしつつ、自らのスタイルを追求しているということができるだろう。

3. その後の展開

さて、エーヴァース氏によるこの総説が発表されたのが 2015 年であるが、情報の目まぐるしく飛び交う現代にあってはここ数年でもさまざまな新しい展開が現代ドイツ組織神学においては生じている。ここでは、解説者の狭い見識で能う限りにおいて、2015 年から現在(2024 年)までに出版された重要な文献を紹介してゆくことにする。

広い意味での第一の立場において重要な出来事としてまず挙げられるのは、アイラート・ヘルムス Eilert Herms(1940-)による『組織神学』三巻本(2017)の出版であろう[8]。ヘルムスは日本ではあまり知られていないものの、シュライアマハー研究から出発し組織神学のさまざまな分野において著作を発表しており、今回の『組織神学』も満を持しての出版ということができる。合計で三千ページを有に超すこの大著の全貌を伝えることは容易ではないが、ヘルムスは本書のプロレゴメナを「キリスト教的生 das christliche Leben」という中心概念をもとに展開し、これこそがキリスト教神学の土台であると同時に明らかにすべき対象であると論じている。ヘルムスの言語と叙述は往々にして晦渋かつ難解であるが、組織神学という形での体系構想が世界的にも退潮してきている現代において、本書はひとつの記念碑的な著作になる可能性もあるかもしれない。

第二に、ウルリヒ・バルト Ulrich Barth(1945-)による『キリスト教の象徴――ベルリン教義学講義』も第一の立場にとって大きな意味を持つ著作といえる[9]。バルトはシュライアマ

---

[7] ドイツの哲学におけるこの傾向、そしてエーヴァース氏の本論でも一部紹介された哲学者のアントン・フリードリヒ・コッホ Anton Friedrich Koch については以下も参照。岡田勇督「A・F・コッホの解釈学的実在論」『夜航』第 4 号、2019 年、52-68 頁.

[8] Eilert Herms, *Systematische Theologie. Das Wesen des Christentums: In Wahrheit und aus Gnade leben*, 3 Bände, Mohr Siebeck: Tübingen, 2017.

[9] Ulrich Barth, *Symbole des Christentums. Berliner Dogmatikvorlesung*, Hg. Von

ハーやエマヌエル・ヒルシュの研究から出発し、数多くの理論的な論文を個別に発表してきたが、ここで自身の体系的著作を世に問うことになった。ヘルムスがあくまで広い意味において第一の立場に属するといえるのに対して、バルトは主観性理論をもとにリベラル・プロテスタンティズムの教義学を代表するという意味で、第一のサークルの中心により近い人物といえるだろう。副題にもあるように、本書はベルリン・フンボルト大学で行われた講義から発展したテクストであるが、内容からしてもその体系性からしても実質バルトの主著となる組織神学として見なすことができる。この著書においてバルトは教義学を「キリスト教の象徴の解釈学」と規定し[10]、キリスト教の象徴(例えば創造、罪、救いなど)を解釈しながら、それらがどのような〈神の表象〉や〈人間の感情〉と結びついているのかを体系的に論じてゆく。やちなみにこのバルトの著書は、ヘルムスが 100 頁を超える(!)批判的な書評を発表したことも話題となった[11]。このような批判的応答も含めて、現代ドイツ組織神学における諸立場の見取り図を描くことが将来的には必要になってくるだろう[12]。

第二の立場である解釈学的神学においても、今日に至るまで活発な研究が継続されている。驚異的とも言っていいのはダルファートの著作ペースであろう。2015 年以降はほぼ毎年といっていいほど単著の出版が続き、さまざまなテーマについての著作を世に問うている。なかでも 2018 年に出版された『理解の技法』は、解釈学の基本的なテーマから出発し

Friedemann Steck, Mohr Siebeck: Tübingen, 2021.

[10] U. Barth, *Symbole des Christentums*, S.75.

[11] Eilert Herms, Moderne „liberale“ Dogmatik statt veralteter „kirchlicher“. Zu Ulrich Barths kultur- bzw. religionswissenscahftlicher Dogmatik phne Dogma, in: *Streit-Kultur. Journal für Theologie*, 2023, S.79-197.

[12] なお、〈宗教概念〉という切り口も第一の立場の重要なモチーフとして発展が続けられている。自然科学や社会科学などとの広い関係から宗教という概念にアプローチする方法はもちろんのこと、もう少し狭い意味での神学における宗教概念の取り扱いとしては以下を参照。Georg Pfleiderer/ Harald Matern (Hg.) *Die Religion der Bürger. Der Religionsbegriff in der protestantischen Theologie vom Vormärz bis zum Ersten Weltkrieg*, Mohr Siebeck: Tübingen, 2021. この論文集はエルンスト・ファイル Ernst Feil(1932-2013)による一大プロジェクト Religio の続編として構想された(Ernst Feil, *Religio*, 4 Bände, Vandenhoeck & Ruprecht: Göttingen,1986-2012)。神学にとっての宗教概念の重要性という問題意識から出発し、ファイルはローマ時代の religio からシュライアマハー・ヘーゲルの時代に至るまでの西洋における宗教の概念史を四巻にわたって重厚に描き出した。シュライアマハー以降の宗教概念史はそのさい今後の課題となされていたが、本論集はさまざまな神学者が手分けして第一次世界大戦までの叙述を担当することによって、この課題をグループワークで解決したということができる。この論集の序論にも先行研究がまとめて整理されており、研究状況の把握として便利である。ただし、このような組織神学者が中心となってまとめた宗教概念の取り扱い方は、しばしば経験的な宗教学によって批判されることもある。これについてはハイデルベルクの宗教学者であるミヒャエル・ベルグンダー Michael Bergunder(1966-)の近年における諸論文などを参照(例えば Michael Bergunder, „Umkämpfte Historisierung. Die Zwillingsgeburt von Religion und Esoterik in der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts und das Programm einer globalen Religionsgeschichte“, in: Klaus Hock (Hg.) *Wissen um Religion: Erkenntnis – Interesse. Epistemologie und Episteme in Religionswissenschaft und Interkultureller Theologie*, Evangelische Verlagsanstalt: Leipzig, 2020, S.47-131)。

つつ解釈学的神学へと接続する内容となっており、いま一度解釈学という分野・方法論の土台を掘り返して確認するような動きであったといえるだろう[13]。このように多作なダルファートであるが、体系的な教義学・組織神学を発表しようとしているのかは確認できない。上記のヘルムスやバルトなどのような、プロレゴメナと各論を備えた厳密な意味での教義学・組織神学の構想でいえば、解釈学的神学は実のところあまり多くの成果を生み出してきたサークルではない(そういえるのはおそらくゲアハルト・エーベリンクの『キリスト教信仰の教義学』のみであろう)[14]。それゆえに、今後のダルファートの展開は注目されるところである。

ダルファートに続くシュテルガーや若い世代のフォン・ザースでも研究は継続されている。シュテルガーは近年おもに編著の出版が目立ち、単著はあまり多く見られないが、近年〈責任〉の概念にかんする小著が発表された[15]。これは入門シリーズの一環かつ 100 頁に満たないほどの短い本ではあるが、エーヴァース氏の本論でもテーマ化された解釈学的神学の中心的カテゴリーである〈受動性〉概念と切り結ぶ形で〈責任〉の概念を扱っており、そのような意味でシュテルガーの教授資格論文以降の展開が見られるものとなっている。フォン・ザースも近著において〈希望〉のカテゴリーをもとに、組織神学的な挑戦へと足を踏み入れつつある[16]。

第三の立場である分析形而上学としての神学にかんして言えば、その主要な舞台である叢書「コレギウム・メタフィジクム」は現在も継続されて 34 巻を数えるまでになっている。ここに近年収録されている著作を見てみると、この第三の立場が次の二つの傾向において狭い枠にとらわれずに自分たちの地平を拡大していることが見て取れるだろう。第一に挙げられるのは、〈神学/哲学〉という区分の相対化である。現代組織神学の一潮流として紹介されたこの立場であるが、「究極的な問いに対して理性による解答を与える試み」としての形而上学という自己アイデンティティからも分かるように、狭い意味での神学と宗教哲学はそこにおいてほとんど区別されずに融合している。ここから延長線を描く形で、近年「コレギウム・メタフィジクム」に収録されている著作も、形而上学という枠組みに入るものであれば哲学サイドからの研究も収録されているようである(一例として、近年亡くなった哲学者イェンス・ハルフヴァーセン Jens Halfwassen(1958-2020)への追悼論文集を、教え子であるマルクス・ガブリエル Markus Gabriel(1980-)などが編集・出版しているのも見受けられる)[17]。このような哲学との緊密な共同作業は、この第三の立場のひとつの特徴といえる

---

[13] Ingolf Dalferth, *Die Kunst des Verstehens. Grundzüge einer Hermeneutik der Kommunikation durch Texte*, Mohr Siebeck: Tübingen, 2018.
[14] Gerhard Ebeling, *Dogmatik des christlichen Glaubens*, 3 Bände, Mohr Siebeck: Tübingen, 1979.
[15] Philipp Stoellger, *Verantwortung wahrnehmen als Verantwortung aus Leidenschaft*, Springer: Berlin, 2022.
[16] Hartmut von Sass, *Außer sich sein: Hoffnung und ein neues Format der Theologie*, Mohr Siebeck: Tübingen, 2023.
[17] Tobias Dangel/ Markus Gabriel (Hg.) *Metaphysik und Religion. Im Gedenken an Jens Halfwassen*, Mohr Siebeck: Tübingen, 2023.

だろう。第二に、上ですでに部分的に触れたことであるが、〈大陸/分析〉という区分もつねに脱構築されつつある。近年の「コレギウム・メタフィジクム」では、いわゆるドイツ古典哲学の宗教論に対する分析哲学的なアプローチなども多く収録されることによって、〈大陸/分析〉という区分につねに挑戦が突きつけられている。これも、同様の傾向にある現代ドイツ哲学との共同作業のうえに成り立つものといっていいだろう。

4. 補足と結び

さて、ここまでがエーヴァース氏の本論において紹介された三つの立場のその後の展開であるが、日本の読者のなかには、20 世紀後半において特徴的な立場であったパネンベルクやモルトマンの立場がその後どうなったのかと疑問に思われる方もいるかもしれない。パネンベルクに連なる立場は、エーヴァース氏の本論の注 22 で取り扱われている。また、モルトマンにおける組織神学的な側面を継承する神学者としては、本論でも扱われているミヒャエル・ヴェルカーMichael Welker(1947-)を挙げることができるので、そちらを参照されたい[18]。モルトマンにかんしては彼の政治神学的な側面も分けて考えることができるが、これはおそらく、現代ドイツの〈教義学・組織神学〉における新潮流を整理するという本論の性格上取り上げられなかったのではないだろうか[19]。

本翻訳と本解説によって、日本の読者にとっては必ずしも明瞭ではなかった現代ドイツ語圏における組織神学の一視角が与えられることを願う。しかしながら、これがあくまで一視角でしかないという相対化の眼差しもつねに読者には求められている。言うまでもないことだが、ここに紹介されている潮流であるからといってその方針を絶対視することは避けなければならないし、ここに紹介されていない潮流だからといってまったく価値がないということにもならない。重要なのはこのような総説による一通りの概観を得たうえで自らの研究の位置づけを探り、それを具体化してゆく中でこれらの主要潮流ないしはこの概観そのものを批判的に検討してゆくことであろう。

---

[18] ミヒャエル・ヴェルカーについては以下も参照。岡田勇督「書評：Michael Welker, Zum Bild Gottes. Eine Anthropologie des Geistes, Evangelische Verlagsanstalt, 2021」『TARB: Tokyo Academic Review of Books』(26), 2021 年 (https://doi.org/10.52509/tarb0026).

[19] この方向性を継承するあり方としては、ドイツでもさかんに論じられている〈公共神学 Öffentliche Theologie/ Public Theology〉の議論を参照されたい。公共神学は公共圏のなかにおいてキリスト教会・神学が担うことのできる位置や責任を模索する政治神学の一つのあり方であり、ドイツ・プロテスタント教会 Evangelische Kirche Deutschlands (EKD)の前議長だったハインリヒ・ベトフォート・シュトローム Heinrich Bedford-Strohm(1960-)や、そのもとで迎えた 2015 年頃からの難民危機における EKD の政治・社会参加などによって広く認知されるようになったといえるだろう。これについては、ベトフォート・シュトローム自身が編集主幹の一人を務める Evangelische Verlagsanstalt の叢書 Öffentliche Theologie を参照。ただし、モルトマンとの連続性でいえば、モルトマン自身は自分の〈政治神学〉と近年の〈公共神学〉を区別したうえで、後者がまだ政治的に十分にラディカルではないことを批判している(Jürgen Moltmann, „Politische Theologie und öffentliche Theologie“, *Evangelische Theologie*, 4(79), 2019, S.287-290)。